



M 2 石川美由紀 図 1 《花と歩く》 白麻紙 岩絵具 2100 × 3000 (mm) 「人物、植物をモチーフとした時の流れの表現」より

《花と歩く》  
人物、植物をモチーフとした時の流れの表現

《Walking with flowers》

On Expression of the Passage of Time using Humans and Vegetation as a Motif

石川美由紀  
Miyuki ISHIKAWA

崇城大学大学院芸術研究科美術専攻  
Division of Fine Art, Graduate School of Art, Soujo University



図1 《花と歩く》 白麻紙 岩絵具 2100 × 3000 (mm)

## 1. はじめに

私は幼い頃、想像した可愛い女の子や家の庭に咲いた花を描いたりして遊んでいた。そのため、大学で本格的に絵画を学ぶようになってからも人物、植物2つのモチーフを好んで描いてきた。初めは自身の理想とする女性像の追求に重きを置き、植物は画面の装飾的な役割として描くことが多かった。しかし、屋外で写生に時間を費やし季節の植物と向かい合う中で、その時に感じたことや状況から作品を展開するようになった。そのことが、人物の造形やポーズにも影響を与えることとなった。

学部での卒業制作《朝顔の咲く道》では、自宅の庭のアサガオの写生をもとに、人物とアサガオを構成し未来に進んでいくという思いと未来への時間の流れを表現した。一方修了制作《花と歩く》では、過去を主題とし時間の流れの表現を試みた。本修了制作は制作に悩んでいた時、自身の植物の写生を見返し作品に展開したか否かにかかわらず写生に費やした時間の全てが自身の制作の糧となっていることを実感したことから発想を得ている。画面では人物を左側に配置し、その背後から画面右端に向かって花々を広がるように構成することで、過去の思い出や体験を表し、現在から過去への時間の流れを表現した。

## 2. テーマ設定

本修了制作《花と歩く》は、時間の経過や、現在から過去への時間の流れの表現を試みるものである。そして、自身の絵を描

き続けてきた時間を振り返りその集積として描いている。そのためこれまで作品の中でよく描いてきた人物と植物をモチーフとしている。

そもそも修了制作発想のきっかけは制作に苦しんでいた時、植物の写生を見返した時にある。その時までの数ヶ月の間、修士課程の半分が終わろうとしており、修了制作について題材も決まらず焦っていた。発想を得るため写生を行っていたがどれも写生を行っていた当時は修了制作に繋がるとは考えていなかった。しかし、貯まった植物の写生を並べ、修了制作に繋げられるとは思ってなかった写生たちが1つの作品の中で十分に生かせると気付いた時に私は救われた。写生に費やしていた時間は無駄ではなくそれ以前のすべての時間が現在の自分の制作を支えてくれている。その経験から、過去へと立ち返るような過去への時間の流れを感じられるような表現を目指そうと考えた。

これを契機に、改めてそれまでの描いてきた人物、植物というモチーフを見つめなおした。私は男兄弟の間に挟まれて育ち、男の子のような遊びばかりをしていたために女の子らしい遊びに縁が薄かった。しかし一人で遊ぶ時にはいつも落書き帳に想像した可愛い女の子やテレビに映るマンガなど、そういったものを描いていた。そのような幼少期を過ごし、本格的に絵画を学ぶようになってからも幼少期と同様に「憧れ」の対象としての女性を描くことに興味を持った。

しかし大学で本格的に作品を描くようになり、やはり女性を多く描いてきたが、作

品を描くということは、そこに必ず自己投影がなされ、憧れの対象としての女性と自画像としての人物の境界が定かではなくなってくることとなった。これは、たとえ実在する特定の人物を描いた場合でも例えばそれが男性だったとしても同様のことが起こり、人物を描くということには常に二つの意味が存在するのではないかと考えている。今回、女性を描くに当たり形は子供の頃からの憧れの対象としての姿を、作品の内容としては自己という位置づけで制作に臨んだ。

また植物というモチーフも幼いころから身近にあった。祖母が園芸好きで自宅の庭には季節ごとに様々な種類の植物が花を咲かせていた。日本画を学び始めてからは写生に時間を割くようになり、植物とより向かい合うようになった。そもそも私が専攻する日本画において「写生」は最も重要なプロセスの一つである。これは日本画という領域に限らず、日本文化の根底にあるもので、歌や音楽をはじめ文学や衣食住に関わる工芸品等々も全て日本の自然物との関わりの中で生まれ、絵画の場合は「写生」を通して情報を得て作られるものである。今回は植物の写生を自身の過去を振り返る手助けとしても使用する。その日の匂いや天気、感情など紙の上に視覚的情報として残っていなくても、植物の写生を見るとその当時のことが思い出される。私にとって過去という時間に向き合わせてくれるものが植物の写生である。

### 3. 卒業制作《朝顔の咲く道》について



図2 《朝顔の咲く道》 1620 × 3240 (mm)

本修了制作には自身の卒業制作である《朝顔の咲く道》が関係している。自身の絵を描いてきた時間の集積、ひいては過去をテーマとしたのは卒業制作にて未来をテーマとしていることが影響している。学部の4年間の終わりという人生の節目のような作品である卒業制作にて未来を見つめそれをテーマとしたのだから、同じく節目といえる修了制作では過去を見つめそれをテーマとすることを決めた。

卒業制作の題材に長らく悩んでいた時、リュウキュウアサガオが自宅を覆い尽くさんばかりに葉を広げ多くの花をつけているのが目についた。祖母が言うには、冬になりいっきに枯れてしまうまでは成長し続け花をつけるという。その姿が未来へと進む力をくれているようであり自身の状況とは関係なく過ぎる時間を体現しているようだった。どんな状況でも時間が進むならば少しでも前向きに未来へ進んでいきたいという思いから、未来への時間の流れの表現を卒業制作の中で試みた。修了制作とは逆に未来を見つめることで現在の希望や力としたのである。

修了制作でも横に長い構図を取ったのは

卒業制作で未来への時間の流れの表現を経験したことから来ている。卒業制作では未来に進む想いの表現のため人物の前方に広く空間を



図3 リュウキュウアサガオ  
(自宅2013/10月)

取り、前を見据え歩く姿を描いた。そして人物と関係なく進む時間と未来への期待を表すため、人物の進行方向と同じ方向に成長を続けながら花を咲かせる朝顔を描いた。

本修了制作では過去の体験や思い出を振り返り、今の力にすることとそれまでの時間の経過を感じてもらうことが目的となる。人物の位置や動き、植物が咲き広がっていく方向は卒業制作で行った手法を参考にすることができる考えた。

## 4. 修了制作について

### 4-1 制作過程について

日本画の基本的な制作過程として写生、小下図、草稿、本紙の4つの段階がある。先にあげた卒業制作を含む本修了制作に至るまでの作品はこの工程を遵守している。それというのも、日本画の画材は色彩や構図を大きく修正することが難しいからである。このような日本画の性質のために小下図で完成の色彩や構図を明確にし、草稿で大きな構図の誤りを防ぐのである。

本修了制作では実際の画面にて色彩や構図の判断を行うため小下図の制作を行わなかった。これまでの制作で度々感じたことであるが、小下図という一つの完成の形を見てしまうと思考が凝り固まってしまう画面上での構図や色彩の違和感に気付いても補正しにくいと考えた。卒業制作でのことを例に挙げると、人物の服の色が小下図の中では白であったのだが画面に描いていくにつれ、白では人物の印象が弱いと感じながらも(図2)のように黒に変更するまで随分と時間がかかったのである。

### 4-2 構図について

構図を決める草稿段階ではなるべく自由にモチーフを動かせるよう、それぞれのモチーフを個々の紙で用意し、岩絵具で下地を作った画面にマスキングテープではりつけた。人物は実際に描く大きさに模造紙に描き、植物は各植物の写生を印刷機の印刷の倍率を110~130%ぐらい調整し大きさの違うものを数十枚ずつ印刷した。この方法は、構図の変更が非常にしやすく実際に画面上に描く大きさなのでモチーフとモチーフのバランスや関係が見やすい。ただ植物



図4 《花と歩く》草稿



の写生は作品にする目的ではないものも多かったため、画面上で密度の不足などを感じることがあり後々描き足すこととした。

本修了制作は自身の絵を描いてきた時間の集積であり、過去の体験や思い出は現在の力となることを表現することを目的としている。そして、私の頭の中には大まかであるが人の歩んだ跡に花が咲き広がっていく絵が浮かんでいた。

人物の位置は画面の中で一番初めに決めた。卒業制作のときから、画面左から右に向かって時間が流れる意識があり、修了制作では過去がテーマとなっているため卒業制作とは逆の位置に人物を立たせたのである。人物の位置と向きが決まったことで自ずと花の広がる方向は決まったのである。

#### 4-3 モチーフについて

前に述べた通り今回人物は憧れの対象としての姿を、作品の内容としては自己という位置づけで制作に臨んだ。写生から自身の過去を振り返ろうとしたように、歩んできた道のりを振り返るため立ち止まる人物の姿を描いた。少し大人びた人物を目指したため、顎のラインをシャープにし、体のラインを出しつつも品よく見せてくれる青いロングのワンピースを衣装に選んだ。

画面の中に描いている花の種類としては、椿、紫陽花、トリトニア、アイリス、鬼百合、水仙の6種類である。どれも自宅の庭に咲いていたものだが、紫陽花に関しては別の場所で写生したものも含まれている。草稿段階では紫陽花を入れることは考えていなかったのだが、人物の周りにどうしても密度のある花が欲しいと感じ、取りいれ



図5 紫陽花下地



図6 紫陽花着彩

た。以前の作品で紫陽花を題材にしたこともあって、人物の最も近くに咲かせるのがしっくりくると感じた。画面上で過去に遡っていくほど自分でも無意識に古い写生を自然と配置していて、これは今回のテーマと草稿のやり方のお蔭だと考えている。椿は本来紫陽花よりも前に描いた写生であるが、写生当時から何らかの形で作品に描きたいと思っており、未だ出来ていないことが人物の前に咲かせた理由であると考え。写生時に感じた、それぞれの花の造形の美しさや満開の時の生き生きとした姿を描くために、下地の色を暗めにし、そこから鮮やかな細かい粒子の絵の具で花脈や花びら凹凸をなるべく一度で描くことで表現している。実際花になかった鮮やかな色を使うことで過去である花々が時を経て自分の中で鮮やかに色付いたことを表現した。

## 5. おわりに

今回、修了研究において自身の過去や時間の経過を絵画上で表現することを目指し研究テーマとした。現代は絵画が描き手にとって自己を見つめ、成長するための大きな一手段であることも絵画の存在する一つの意義となったことも事実である。また、時間の経過に対する意識は人類が誕生以来、いつの時代も何処の国にあっても永遠に存在するもので、私個人の感情的なものとしてだけではなく、画面から感じ取ることが出来るような作品をめざした。

制作中自身の過去と向かい合い続け、記憶を呼び起こすものとして植物の写生を用いている。しかし、植物の写生の紙の上にあるのは色や線などの視覚的情報でありそれ以外の情報、例えば匂いや、天気、音や思ったことなどは残そうとして残せたものではない。そして、呼び起こされる情報の量は描く対象にどれだけ向かい合ったかに深く関係している。制作を終えて改めて写生の重要性に気付かされた。

また、本修了制作では過去遵守してきた1つの制作過程を変更している。制作のテーマに合わせ制作過程を変更することで今回は自身の中でいい結果を得られたと考えている。しかし、これまでの制作中次の工程に迷った時、小下図に救われたことも体験としてある。小下図をこれから作らないという訳ではなく作品にあった制作工程を選び取っていきたい。